

□ 書評 □

井上 泰(著)

学生のための疾病論

―人間が病気になるということ―

臨床で役立つわかりやすい 病態生理学読本

石倉 隆

(広島県立保健福祉大学理学療法学科)

臨床家として病院に勤務していた頃、カルテや処方箋に記された疾病の病態生理についての理解が乏しく、専門書を紐解いていたことを思い出す。理学療法士は、疾病に起因する機能・能力障害の概要は十分に理解していると思われるが、その生理学的機序や内科的な病態を理解しているかといわれればいささか心もとないものである。しかし、内科的な部分も含めた疾病の病態生理を理解することは、科学的根拠に基づく理学療法が求められている昨今では非常に重要なことであり、患者の体調やリスク管理を行なう上でも欠かすことのできない知識である。とはいうものの、様々な疾患が理学療法の対象となる現在において、全ての疾病の病態生理を理解することは頭底困難なことであると思われる。

筆者はこれまで病態生理の理解のために書物に頼ることが多かったが、この手の教科書や専門書は基本的な知識の不足も手伝って、非常に難解なものが多かったように思う。しかし、今回刊行された井上泰先生による「学生のための疾病論―人間が病気になるということ」は、理学療法士の病態生理の苦手意識を払拭さ

せる一冊になりそうである。

内容は系統別に大別された 47 疾患について解説しているが、その解説の方法が実にユニークである。疾患名のあとには格言にも似た疾病の特徴が 20 字程度のわかりやすい言葉で述べられ、その後にはこれまた小説と見まがう表現と挿絵で事例を紹介している。これだけ読んでも実際にその疾病に罹患するとどのような症状を呈するかが抵抗なく頭に入ってくる気がする。そこに示された図表もフリーハンド調で親しみが湧き絵本を見ているような錯覚を覚えるほどである。時間のない臨床家にとって更にうれしいことに、各疾病の解説の最後に内科的臨床像が 3 つの短い箇条書きで示され、一見して内科的臨床症状と問診やカルテ記載事項、臨床検査結果の必要項目が理解できるようになっている。また、系統別疾患によって分けられた各章のそこそこに病態生理の基礎についてのコラムが設けられ、各疾病の病態生理に対する理解を更に深めることができるように工夫されている。

現代の理学療法は特定の疾患に対して行われるものではなく、全ての疾患に対して行われるものといっても過言ではなからう。このような現状では、診断名に示された疾患をすばやく理解し、正しい病態生理の認識のもとで理学療法に臨む姿勢が求められる。本書は、臨床場面で活用できるのみでなく、“紋切り型”の教科書とは異なり読み物としても十分に楽しめる。常日頃から読み物的に本書を活用することによって拒絶反応を示すことなく病態生理の予備知識を得ることも可能なのではないだろうか。

● B5 版 228 頁、定価(本体 2,600 円+税)

送料実費 2001 医学書院・刊